

説教 『 荒れ野という源流にて 』 山本 護 牧師
聖書 イザヤ書 35 : 1~2 / マタイによる福音書 3 : 13~17

強国に蹂躪されている民の中でイザヤは預言する。「荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ。砂漠よ、喜び、花を咲かせよ。野ばらの花を一面に咲かせよ(イザヤ 35:1)」。そんな地にこそ「人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る(35:2)」。これは逆説ではない。繁栄する街にではない、自然豊かな山野にではない。荒れ野に、荒れ地に、砂漠に「主の栄光と神の輝き」があるのだ、と。いろいろ想像が喚起される。

イエスの時代には、「洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、〔悔い改めよ。天の国は近づいた〕と言った(マタイ 3:1~2)」。新たな扉は荒れ野で開かれるのか。ヨハネの許には信仰の権威者たちも大勢やって来て、悔い改めて洗礼を受けた(3:7)。神殿の祭司貴族サドカイ派でも、信仰覚醒を唱えるファリサイ派でも、自らの源流が荒れ野にあることを自覚していた。荒れ野での厳しい裁きと悔い改め。そこに御心を予感し、預言者の声として叫ぶ(3:3)洗礼者ヨハネに、目を開かされた。

信仰の権威者らは彼らなりに求道的で、洗礼者ヨハネに厳しく批判されても(3:7~9)反発しなかった。だが「自分の壁」を乗り越えられたのはそこまで。イエスのことは理解できず、後に殺意にまで至る。ヨハネはイエスが誰であるかを知っていたが(3:11)、その奥に底光りしている神の決意までは分からなかった。ゆえにイエスの洗礼志願を思いとどまらせようと、「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか(3:14)」と言った。洗礼を授ける者が、それを受ける者よりも「優れている(3:11)」と思っているからだ。イエスは「今は、止めないでほしい」と応じ、「ヨハネはイエスの言われるとおりにした(3:15)」。理解したからではない。分からないまま従った。信念や斟酌や礼節をふり払い、納得せぬまま「この人が言う事」を優先した。

イエスにも罪の告白や悔い改め、洗礼が必要だったのか。否、イエスは罪が浄められる洗礼は必要ない。このところがヨハネにさえ分からないイエスの決意。洗礼を受ける者は皆、罪を告白し(3:6)、罪人であると自覚する。悔い改め受洗する者たちに「神の意志」を見、イエスはそこへ踏み込まれた。言い換えれば、そこで人々の罪を負っていく決意をし「罪人の洗礼」を志願された。それ以後、イエスはいつも罪を自覚する者と共にあった。イエスは、罪を自覚する者を御自身に結びつけておられる。

他方イエスはとりわけ自由な若者で、身内にとっては厄介者(マルコ 3:21)。こんな若者が、誰にも理解されない決意を胸に洗礼を受ける。逆から大胆に言えば、この若者に「キリストが現れた」。ヨハネでさえ分からぬ生き方を、イエスという若者が選び取った。神の御心に従うことは他者にはうかがい知れぬ。私たちも各々神の招きを受け、他者と異なる「私の歩み方」で神に従う。孤独か、清々しさか。

イエスが洗礼を受けると「天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった(3:16)」。イエスが洗礼を受けることによって、神の天が、罪人の地に結びついた。罪人と共にあり、その罪を負われる御子イエス。これは神の御心であると同時に、一人の不可解な若者の決意でもある。私たちも各々、他者には不可解な道を進み、御心を世に顕そう。



【おまけのひとこと】

イエスをキリスト一色に塗りつぶしてはつまらない 大食漢で大酒飲み(ルカ 7:34)までを神の御子にすることもなからう あのイエスは 悲しみ 怒り 不安に脅えた まぎれもない一人の男だった